
仮面ライダーオーズ/OOO feat . DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

FOX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ/OOO feat・DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

【Nコード】

N2950Y

【作者名】

FOX

【あらすじ】

仮面ライダーオーズ、火野映司が相棒のアンクと共に、真木博士による“世界の終末”を阻止してから半年あまり。映司はいなくなったアンクと再開できる事を信じ、旅を続けていた。

時は流れ3月の中旬、映司はかつての仲間とお花見をするため一足早く日本に帰国し旅をしながら夢見町を目指していた。そしてその旅の途中、ある町に訪れた際ある少年と出会う。この出会いが映司の新たな戦いと旅が幕を上げる。

誘いと帰国と落とし穴（前書き）

初投稿になりますFOXと言います。

初めてなので温かい目で見ていただくと幸いです。

話はオーズ最終回の後からですが、この物語は、仮面ライダー×
仮面ライダー フォーゼ&オーズ MOVIE大戦MEGA M
AXの物語を無視しています。ご了承下さい。

誘いと帰国と落とし穴

かつてある戦いがあった。

その戦いは世界の終焉を望む一人の科学者、真木清人が起こしたものであった。

しかしそれを阻止した青年がいた。

青年の名は火野映司。

火野映司はこの戦いの中で相棒であり、欲望の怪人グリードであるアंकを失った。

しかしアंकは最後、満足していた。満たされることが無い自分が死ぬとこまでこれたということに。

この戦いの後、火野映司は止まっていた旅を再開した。その手には2つに割れたタカのコアメダルがあった。映司は再び相棒であるアंकに会えることを信じ、今日も明日のパンツを持って旅を続ける……。

- - - - -

3月中旬、日本、紀乃川市。現在、火野映司はこの町にいた。本来ならまだ海外にいたはずだが、とある理由により日本に戻ってきていた。

その理由は今から約数日前までさかのぼる・・・。

・
・
・
・

「お花見ですか？」

『そうよ！映司君、たまにはみんなでパーッとやりましょうよ！』

映司は画面中にいる女性に花見に行かないか？という誘いを受けていた。

この女性の名前は白石知世子。多国籍料理店クスクシエの店長であり、以前映司が日本にいたときにお世話になっていた。現在も日本に帰った時はお世話になっている。

ちなみに画面の中いる理由は、これがテレビ電話だからである。映司はこのテレビ電話を定期的に利用し連絡を取り合っている。

「いいですよ。やりましょうよお花見。」

『じゃあ決まりね！日時は後でメールで送るから！』

「わかりました。ちなみに参加者は？」

『参加者は、私に後藤さんに伊達さん。あと里中さんと鴻上会長もあ！あとちゃんと比奈ちゃんと信吾さんも来るわよ！』

「そうですか。わかりました。じゃあまたお花見の時に。」

『待つてゐるわよ。』

・
・
・
・

というやりとりがあつたのだ。

ちなみに映司はメールで送られてきた日時より早く帰ってきていた。本来なら花見の日の前日でも良かったのだが、映司はあえて10日以上早くきて、旅をしながら向かうのもいいだろうと考え今にいたる。

「結構いいところだよな〜ここ。」

映司は歩きながらこの町の感想を言っていた。

「ん？、あれは・・・中学校かな？」

映司は左手に見えた建物を見てそう言った。

「今の時期だと、ちょうど3学期の終了式あたりかな？」

そんな予想しながら映司は中学校の校門の前まで来た。今時間帯だからか、校庭には誰もいない。その隣にある体育館らしき建物からマイクを使って喋っている人の声が聞こえる。どうやら映司の予想が当たったようだ。

「本当に終了式やってるんだ・・・ん？。」

その時、映司は校舎の屋上を歩く少年を目撃した。屋上といっても2階ほどの高さの場所である。その少年は馴れているのか、足どりは軽い。外見は遠くからではわかりにくい、金髪であることはわかった。

「馴れているんだろうな。足どりが軽いし。」

映司はしばらくその少年を見ていたが、ふと視界にあるものが映った。

「あれ・・・犬だ。なんであんな所に？あの子をまつてるのかな？あれ・・・剣をくわえてる！？」

普通、剣をくわえた犬などいるだろうか？映司は考えていると、遂に少年が屋上の縁に来た。

「・・・嫌な予感がする。」

映司はそう言うと、校門を乗り越え、剣をくわえている犬に近づく。

慎重に近づき、犬まであと数十メートルの所になった時、少年が華麗に屋上から飛び降りた。

次の瞬間、犬はくわえていた剣を地面に突き刺した。剣が地面に突き刺さると、ピンク色の魔法陣のようなものが現れ、その中心に穴が現れた。

「危ない！」

映司は身を隠していた花壇から飛び出した。穴の位置は少年が飛び降りた時、ちょうど着地する場所にできていた。そのため少年は吸

いこまれるようにして穴に向かって落ちていった。

「間に合えー！ー！」

映司は穴のある場所に向かって飛び込み穴の中に手を伸ばした。
そして・・・

・
・
・
・
・

「なんとか・・・間に合った・・・。」

映司の手はしっかりと少年の手を掴んでいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

「あ・・・ありがとうございます！」

少年は穴ができた事に驚いていたが、さらに映司に助けられた事にも驚いていたようだ。

映司は少年を引き上げようとする。が・・・

ドス！

「へえ？」

何かがぶつかってきた。
そして・・・。

「！？、うぁー！ー！ー」

映司と少年は一緒に穴に落ちていった。映司はその時、自分達が落ちた後穴が閉じる瞬間先ほどの剣をくわえた犬が飛び込んできたのを見た。

おそらく先ほどの音はあの犬が自分の背中に突進した音だったのだろつと映司は思った。

そのまま2人と1匹は穴の中に消えていった。

決断と空間と3つの光（前書き）

第2話です。

書くの難しい・・・。

決断と空間と3つの光

ここは、異世界フロニヤルドにあるビスコッティ共和国。

フロニヤルドには、地球の人々とは違い動物の耳や尻尾を持った人々が生活している。

このビスコッティ共和国には犬耳や犬の尻尾を持つ人々が暮らしている。

そのビスコッティ共和国の中にあるフィリアンノ領。その中にフィリアンノ城は存在する。

現在は夜。このフィリアンノ城の一室である会議が行われていた。

その部屋には重苦しい空気が流れている。

「やはりガレット獅子団は、ミオン砦に攻めて来るようですね。」

1人の男性が発言した。

すると今度は緑色の髪を持つ少女が発言する。

「ガレットは本気でこの城まで侵攻してくるのでしょうか？」

「ガレット獅子団のレオンミシェル閣下は勇猛な方じゃが、かような無茶をされる方じったかのう。」

「理由はどうあれ、この最近の戦はひたすら負け戦じゃ。」

「せめて、ダルキアン卿やテンコ様が居てくれたらのう……。」「

3人の老人は口々に言う。

この老人達が言っているように、現在ビスコッティ共和国は隣国であるガレット獅子団と戦をしているのだが、こここのところ敗北が続き後が無くなっているのだ。

「騎士ブリオツシュやユキカゼにも使命がありますれば。」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪、このフィリアンノ城まで……。」「

「させません！」

老人の1人が不安げに言うと、緑色の髪の少女が叫びながら立った。

「姫様の為にも！ビスコッティの民の為にも！この戦我々が！」

「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ。」

「あ……。失礼しました。」

栗色の髪の少女が緑色の髪の少女を静めた。そして緑色の髪の少女は席につく。

すると……。

「ありがとう、みんな。我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今度は本当に負けることはできない戦いです。ですから・・最後の切り札を使おうと思います。」

ピンク色の髪の少女の発言にその場にいた者全員がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召喚します!」

ピンク色の髪の少女、ミルヒオーレは力強く発言した。

しかしこの時、彼女は気づいていなかった。この勇者召還をしたが為に、何の関係の無い人を巻き込んでしまうことに・・・。

- - - - -

場所は変わって、日本、紀乃川市にあるとある学校。

現在この学校は終了式の真っ最中である。

1人の教師が体育館に向かっている途中、ある生徒とすれ違つ。

「ん?、おいイズミ、どうした?」

教師がそう言うと、イズミと言われた生徒が振り返る。

「ちょっと飛行機があるので！」

「そうか。気をつけていけよ。」

「はい！」

そしてイズミと言われた生徒は教室に戻っていった。

彼の名はシンク・イズミ。

この学校に在学するアスレチックスが大好きな少年である。

教室に戻ってきたシンクは、帰り支度を済ませ教室の窓を開けた。開いた窓からは良い風が入ってくる。

そのままシンクは窓の外に出た。屋根の縁を歩き、教師用の玄関の屋上まで歩いて行く。

ちなみにシンクが何故速く帰るのかは、彼の実家にある。彼の実家はイギリスのコーンウェルにあるのだ。シンクは春休みを実家で過ごす為、速めに自宅に帰り、支度をしなければならいのだ。

そうこうしているうちに屋上の縁に来る。

「よっと！」シンクは華麗に飛び上がった。そのまま綺麗に着地と思われた。が・・・

「てえ？、えーーーーー！」

シンクは驚愕した。

何故なら、自分の着地する場所に穴が開いていたのだから。

「うぁーーーーー!」

シンクはそのまま穴に向かって落ちていく。落ちる・・・そう思った時だった。

パシ!

何かがシンクの手を掴んだ。

シンクは下を見た。下には何とも言えない空間が広がっている。そして、上を見た。そこには・・・自分の手を掴んでいる・・・青年がいた。

「君、大丈夫!? 今引き上げるから!」

青年はそう言った。

「あ・・・ありがとうございます!」

(助かった・・・)

シンクは安心した。そして引き上げられ始める。しかし・・・

ドス!

何かが何かにぶつかった音がした。

（何だろう？）

そう思った矢先。なんと青年が落ちてきた。

「！？。うぁーーーーー！」

シンクは青年と一緒になって叫んだ。

（一体何が起こったんだ！？）

シンクは思った。しかしそれはすぐ解消された。

穴が閉じる瞬間、犬が1匹飛び込んで来たのだ。

（まさか・・・あの犬が！？）

おそらく、自分を引き上げようとした青年を押したのだろう。そしてさっきの音は犬が青年を押した音だったのだろう。

そのまま、シンクと青年と犬は不思議な空間の中に消えていった。

- - - - -

あれからどれくらい時間が過ぎただろう・・・。映司はぼんやりと

考える。

あの穴に落ちてからというものの、映司はずっとこの不思議な空間をさまよっていた。

助けようとした少年と剣をくわえた犬は落ちている途中にはぐれてしまい、どこにいるか分からない。

「はあ・・・これからどうしよう・・・。」

映司はポツリと呟いた。

とりあえず辺りを見渡してみる。

しかし、何も無い。本当に何も無い。

「困ったな・・・。」

映司はどうすればここから脱出できるか考え始めた。

・ ・ ・ ・ ・

「駄目だ・・・何も浮かばない。」

映司はため息をついてしまう。

「こんな時にアंकが居てくれたら・・・。」

映司はポケットから割れたタカのコアメダルを取り出す。
アंकならこんな時どうするか。考えてみたが・・・。

「はぁ・・・。」

しかし、出るのはため息だけだった。

その時。

「ん？何だろ・・・この感じ？」

映司は何かを感じ取った。

「懐かしい・・・。」

懐かしい・・・とても懐かしい感じがした。

映司はその懐かしさを探し始める。辺りを見渡す。

「・・・あれは？」

映司の先には・・・赤く光る3つの物体があった。映司はそれに手を伸ばす。

「あと・・・もうちょっと・・・。」

映司は必死に手を伸ばした。

そして、遂にその3つの光を掴んだ。

次の瞬間、映司は真っ赤な光に包まれる。

そしてそのまま、映司を包んだ光はどこかに飛び去っていった。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ（前書き）

第3話です。

今回はビスコッティ側の話になります。

映司が登場するのは次回あたりになります。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ

現在ビスコッティ共和国は、歓喜の渦に包まれていた。

何故か？、それは隣国であるガレット獅子団との戦に勝利したからである。

ビスコッティはここ最近、ガレットとの戦で負け続け、後が無くなるという事態になった。

この現状を重く見たビスコッティ共和国代表領主、ミルヒオーレ・フィリアンノ・ビスコッティはこの現状を打開すべく、最後の切り札である勇者召喚を使用したのだ。

そうしてビスコッティに呼ばれた勇者、名はシンク・イズミ。

勇者シンクの活躍は目覚ましく、一般兵を倒しまくりポイントを量産。更にはビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジとの連携によりガレットの代表領主、レオンミシエル閣下を撃破するなどの活躍ぶりであった。

しかしある事態が起こった。

勇者シンクとミルヒオーレは、なんと勇者召喚した勇者は帰還することが出来ないことを知らなかったのである。

その事実にはショックを受けるシンク。

この事態に責任を感じたビスコッティ王立学術研究院主席、リコッ

タ・エルマールは学術研究院生と共に勇者を帰還させる方法の調査を始めるのであった。しかし結局見つからず。

そしてシンクは、その問題はひとまず置いて別の用件をリコッタに頼のだった。

- - - - -

ここはフィリアンノ城から少し離れた浮島の1つ。

この浮島に3つの人影があった。ビスコッティ騎士団親衛隊隊長のエクレール・マルティノッジ。

ビスコッティ王立学術研究院主席のリコッタ・エルマール。

そしてビスコッティが召喚した勇者、シンク・イズミ。
の3人である

彼らは現在、浮島にある召喚台にいた。

「くう……。うぁ！」

「だから言っただろ。帰れないって。」

シンクはピンク色の魔法陣に手を突っ込み何とか帰ろうとしたのだが、手は弾かれてしまう。

エクレールは短剣をかざしながらそれをため息混じりに見ていた。

「うう……やっぱり駄目なのか……。」

「だから何度も言っているだろう。」

シンクは心が折れそうになる。
すると……。

「勇者様――、準備できました！」

後ろからリコッタの元気な声が聞こえ、シンクとエクレールはリコッタがいる周波増幅器のところへ。

シンクは帰れないならせめて連絡をさせてくれといい、召喚台で携帯を使えばつながるのでは？と考え今にいたる。

そして電波を出すために使われるのが、この周波増幅器である。

ちなみにこの周波増幅器はリコッタが5才の時に発明したらしく、今ではフロニヤルド全域で使われているらしい。

「それじゃお願い。」

「了解であります！」

シンクの合図でリコッタは周波増幅器のスイッチをいれる。

シンクは携帯を開きアンテナが立つか見る。

「……あ！立った！」

その声にリコッタが近寄ってくる。

「何がでありますか？」

「ほら、携帯のアンテナ！」

シンクは携帯の画面に表示されているアンテナを見せる。

「よし！じゃ早速……。」

シンクはアンテナが復活した携帯を使い、地球にいるレベッカや家族・親戚に連絡をとり始めたのだった。

シンクが家族や親戚と連絡をとりあっている時、エクレールは今回の戦いを思い返していた。

（今回は勇者のおかげで勝つことができた。しかしあれは……止めよう。考えただけで恥ずかしい。）

エクレールは今回の戦いで物凄く恥ずかしい思いをしていた。

ちなみに、エクレールが恥ずかしい思いをしてしまったのはシンクのせいである。

（……この後に、もし再びガレットと戦があったら……我々はまた勝てるだろうか……。）

エクレールがそんな事を考えていると・・・。

「ん？、なんだ・・・あれは？」

空をひらひらと舞っている変な物を見つけた。

今エクレールは暇なので、その空を舞っている物を目で追う。

そして・・・悲劇は起こった。

ポフ。

エクレールの顔になにかが被さった。

「!？。な、なんだ一体!？」

急いで顔に被さったもの取る。

被さってきたものにエクレールは戦慄した。
それは・・・

「お、男のパンツだと!？しかも蝶柄!？何故こんな物が!？」

エクレールは素っ頓狂な声を上げる。しかしすぐに黙り込む。

シンクは電話に集中している為か気づいておらず。リコッタはシンクの携帯に夢中である。

(よ、よかった・・・気づかれていない。・・・しかし、何でこんな物が空から降ってくるんだ?)

エクレールは、パンツが降ってきた空を見上げた。だが何故パンツが落ちてきたのかはさっぱり分からなかった。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ（前書き）

第4話です。

今回は映司メインになります。

脱出と紛失と始まる追いかけっこ

ここは、地球と異世界であるフロニヤルドの間にある不思議な空間。

この不思議な空間を突き進む赤い光があった。

「一体どこに向かっていているんだろう……。」

赤い光の中で火野映司は、今どこに向かっていているか考えている。

しばらく進んでいると、視線の先に光が漏れ出している所を見つける。

「もしかして……あそこに向かっていているのかな？」

映司は今、自分が向かっている場所がその光が漏れ出している場所ではないかと予想する。

最初こそ小さい光だったが、進むにつれだんだん大きくなっていく。映司の予想は確信に変わる。

「やっぱり光に向かってる。あそこが出口なのかな？」

光が出口ではないか？映司は心の片隅で期待を膨らませる。ようやくここから出られると。

そして、映司は光の中へと消えていった。

光に突入し、映司は不思議な空間から脱出する。
次の瞬間、目にした光景に映司は我が目を疑った。

「てえ・・・嘘!？」

何故なら・・・

そこは大空だったのだから。

見渡せばそこには雲があり、下を見れば大地が見える。

つまり、映司は大空に放り出されたのだ。当然パラシュートは着けていない。勿論、生身の人間は飛行機などに乗らない限り飛ぶ事など出来ない。

今の映司は丸腰。つまりどうなるか？

「うぁーーーーー!!」

映司は落下を始めた。

もつ落ちるのは本日2回目である。

「う、こんなの聞いてなーーーーい!」

映司は某探偵事務所の女所長のようなセリフを叫ぶ。しかしその叫

びは虚しく大空に消える。

更に映司を追い討ちするかのごとく、悲劇が襲う。

「あー！明日のパンツがあー！あー！」

ポケットに入れておいたパンツが、ポケットから出てしまったのだ。しかもそれは、映司お気に入り蝶柄パンツである。

そのまま蝶柄パンツはひらひら舞ながら、映司は反対方向に行ってしまった。

「そ、そんな……。俺の……。明日が……。」

映司はとてつもない絶望感に襲われる。

そのまま映司は大地に向かって落ちていく。その先に、ある一国の象徴である城があることを知らずに……。

- - - - -

ここは、フィリアンノ城にあるビスコッティ王立学術研究院。

現在研究院では、『召還した勇者の帰還方法』の調査の真っ最中である。

ビスコッティ周辺では、基本的に召還された勇者は元の世界に帰れないとされているのが一般的な考えである。

なのだが、ビスコッティの代表領主であり勇者を召還したミルヒオ
ーレ姫と勇者シンクはこのことを知らなかった。

このことに責任を感じた王立学術研究院主席のリコッタは帰還方法
の調査を名乗り出たのだ。
そして現在にいたる。

ちなみに今、主席でありこの調査の責任者のリコッタは勇者シンク
と別の用件で留守になっている。

だが、主席であるリコッタがいない中でも学院生が調査を続けてい
るのだ。

「なかなか見つからないな・・・。」

学院生の1人が呟く。

「でも絶対見つけるぞ！」

学院生は気合いを入れ直す。

それから数分後。

「ねえーみんな。そろそろ休憩しない？」

違う学院生が他の学院生に呼びかける。

「そうだね。さっきから本棚に向かいっぱなしだしね。」

「喉乾いた〜。」

「主席はいつ戻られるんだろう・・・。」

学院生たちが口々に呟き、休憩しようと中央のロビーに向かおうとした。

その時・・・

ズドーーーーーン!!

何かが学院の屋根をぶち破って落下してきた。

辺りに煙りが充満する。

「な、なんだ!?!」

「え!?! 一体なに!?!」

「ゲホ、ゲホ。煙りが・・・。」

「うう・・・目が開けられない・・・。」

この事態に驚く学院生達。中には砂煙りを吸い咳き込む者や、目に砂埃入り目が開けられない者もいた。

「一体なに事だ!?!」

扉が開きこの事態に気づいた数人の親衛隊の騎士が駆けつけてくる。

「どうした！？一体なにがあった！？」

騎士の1人が学院生に訪ねる。

「わ、分かりません。何かが学院の屋根を壊して「おい！あれは何だ！」「」

学院生が事情の説明を始めようとした時、別の騎士の1人が声をあげた。

そこは中央のロビーだった。

そして、ここにいる者全員が中央のロビーに注目した。

「なんだ・・・あれは？」

騎士の1人が呟いた。

そこには・・・

赤く光る物体があった。

騎士達は細心の注意を払い、その物体に近く。

すると突然、物体を纏っていた赤い光がまるで鳥の翼のように開いた。

翼のように開いた赤いた光は、そのまま羽になり辺りに散らばる。

「うあゝ。綺麗〜。」

学院生の1人が呟く。

「一体何が・・・。」

騎士の1人が言った。騎士は落ちてきた羽を手にもせるが、羽は光となって消えた。誰もがその光景に見とれていると・・・

ドス！

辺りに鈍い音が響いた。

今の音で我にかえった騎士達は剣を持ち、光があつた所に向かって構える。

そこにいたのは・・・

「痛ててえ・・・ん？」

不思議な格好をした・・・青年だった。

- - - - -

火野映司は現状を掴めずにいた。

不思議な空間から抜け出したと思つたら空中で、更に落下途中に明日のパンツを無くしてしまい散々な目にあつた。

それがどうだろう。今は甲冑を着た男達に囲まれているではないか。おまけに剣が向けられている。

「あ、あの……。」

「動くな！」

映司は立ち上がり、とりあえず目の前の男に話しかけるが、見事にスルー。更には動くなと言われた。

「貴様、何者だ！何が目的だ！答えろ！」

「い、いや……何者と言われても……。特に目的とかは無いし……。」

男の質問に答える映司。何者かと言われてもなんと答えたらいいかわからない。目的も特に無い。映司は正直に答えるが……。

「嘘をつくな！目的も無しに屋根をぶち破って空から落ちてくるやつが何処にいる！」

（いや……ここにいるけど。）

映司は思った。

（ん？さてよ？今この人は何て言った？空から落ちてきた？）

映司はそう言われやと自分の現状が分かった。

おそらく、自分はパンツを無くした後この建物に落下してきたのだろつ。

だがそこで疑問が。

（だとしたら、何で俺無傷なんだ？）

今自分は無傷である。普通あの高さから落ちたらひとたまりもないはずだ。

「いいから答えろ！一体貴様は何なんだ！突然赤い光を纏って落下してきて！」

さつきとは別の男の質問。

（赤い光？俺はそれのおかげで無傷だったのか？なるほど・・・納得。）

心の中で1人納得する。

ただし男達のイライラは高まる。

「早く答えろ！」

痺れを切らした男が剣を映司に向けて叫ぶ。

（まずいな・・・どうしよう。何か良い策は・・・。）

映司は思考をフル回転させる。その間にも男は剣を持って迫ってくる。

(・・・やってみるかな。)

映司は賭けに出た。

「・・・う！お腹が・・・急に。」

「！？、おい大丈夫か？」

映司は突然腹を押さえ痛がり始めた。

すると、突然の腹痛を心配したのか、さっきの男が近寄ってきた。

(・・・今だ！)

映司はとっさに立ち上がり、男に突進する。

「ぐほお！」

男は不意を突かれ、映司の突進を受けて倒れてしまう。

「ごめんなさい！」

映司は突進した相手に謝罪しながら扉に向かって走った。

「まで！」

何人かの男達が後を追うが、甲冑を着ているため、走りにくい。その分映司は身軽な為速く走れる。男達は映司の逃走を許してしまう。

「くそ！逃がした！」

「まで。ここは一度引こう。」

「何を言っている！やつは……。」

「今この装備では追いつくのは無理だ。それに人数も足りない。」

「うっ……確かに。」

映司を追いかけてようとした男を別の男がなだめる。

「一旦騎士団詰め所に戻るぞ！そしてロラン騎士団長に報告だ！」

男達はこれからの方針を固め、学院を後にする。

「あ、学院生の皆さんは非難しておいて下さい。念のために。」

最後の1人が学院生にそう告げ学院を後にした。

火野映司とビスコッティ騎士団、両者による追いかっこが今始まるうとしていた。

疑惑と逃走と初変身（前書き）

第5話です。

最後はなんかグダグダに・・・
終わり方も中途半端です。
本当にごめんなさい。

疑惑と逃走と初変身

「よし。連絡完了つと。」

家族や親戚、知り合いなどの連絡が完了し携帯を閉じて一息つくシンク。

だがここでシンクは、背後から強烈な視線を感じた。

振り向くとそこには、目を輝かせている・・・リコッタがいた。

「えつと・・・何？」

「いや・・・勇者様の持っているその携帯、というのを調べさせて欲しいでありますよ。」

どうやらシンクの携帯が気になるようだ。

「まあ、良いけど・・・どうやって？」

「大丈夫であります！ちょっと分解して中の構造を見るだけですから！」

「ぶ、分解！？じよ、冗談じゃないよ！？この世界、保険適用されないんだから！」

「大丈夫でありますよ。」このリコッタ・エルマールが保証するのでありますから！さあ！」

「ちょ！？まって！止めてよ！」

「ふっふっふゝ無駄であります。自分は未知の機械を見るとすぐ調べたくなるでありますから！」

シンクとリコッタが携帯を巡って騒いでいる中、エクレールはそれを呆れたように見ていた。

「全く・・・リコはともかく、勇者は子供か？」

「ちよっ！そんな事言わないで助けてよ！」

シンクはエクレールに助けてを求める。

「まあなんだ・・・頑張れ。」

「見捨てられたーーーーー！」

シンクの叫びがこだまする。

するとリコッタが・・・

「ところでエクレ、その右手に持っている布はなんですか？」

「ん？、あゝこれか。これは・・・はあ！」

とつさに右手を後ろに回し布を隠すエクレール。

「ん？エクレ、今何隠したの？」

「な、何だ勇者！お前のき、気にする物じゃないぞ！」

「エクレ、明らかに動揺してない？」

「ど、動揺などしていない！」

「いや、してるでしょ。」

「してない！」

「いやだって……。」

「してないものはしと取ったであります！」ああーーーーー！
「！」

エクレールがまるで、この世が終わりとはかりに叫ぶ。

リコッタはエクレールから奪った布をシンクに持って行く。

「はい♪勇者様♪」

リコッタに布を渡されるシンク。

「ありがとう。さてこの布の正体はと……え？」

「こ、これは！」

シンクとリコッタが驚愕の声を上げる中、エクレールはその場に体育座りをした。顔はうつむいている。

「これ・・・男性用の下着だね。しかも下半身の。」

「エクレは・・・男性下着を集めるのが趣味だったでありますか！？」

するとエクレール。顔をばあ！と上げ一言。

「そんなわけ無いだろ！！誰が男の下着など集めるか！！！！！！」

「いや・・・だって・・・。」

「実際ここにあるでありますよ？」

シンクとエクレールは呟く。

「違う！それは空から降ってきたんだ！」

「・・・エクレ正直にはこう・・・楽になるよ。」

「そうでありますよエクレ。例えばエクレにそんな趣味が合っても・・・自分はエクレの見方でありますよ。」

シンクとリコッタはエクレールに正直になれと促す。

「違うんだ・・・それは空から・・・。」

エクレールは今にも泣きそうな感じになる。
すると・・・

トゥルルル。

電話の着信音のような音が鳴る。

エクレールは周波増幅器に付いている受話器を取る。

「はいっ。こちらエクレール。」

さっきの表情が嘘のように消え、いつもの表情に戻る。

『エクレか？私だ。』

「兄上？どうかなされましたか？」

『ああ。重要な要件だ。』

重要な要件という単語に反応したエクレールは表情を引き締める。

「それで、要件とは？」

『ああ。すぐに勇者殿と主席を連れて騎士団詰め所に戻ってきてくれ。大至急だ。』

「何かあったのですか？」

すぐに戻ってきて欲しいと言われ、何か起こったと推測するエクレール

『そうだ。緊急事態だ。フィリアンノ城に侵入者が現れた。』

「侵入者！？」

侵入者と言われ驚くエクレール。

『数分前に学院の屋根を壊して侵入したようだ。幸い怪我人はいなかったが、今騎士団詰め所に捜査本部を設置して、捜索にあたっている。すぐに戻ってきて捜索に合流して欲しいのだ。』

「分かりました。すぐに戻ります。」

『頼んだぞ。』

「はっ！」

そうして受話器を置いた。

「エクレ……。」

シンクがエクレールを呼ぶ。

「何だ？」

エクレールも振り向く。そこにはさっきとは違い真面目な表情のシンクとリコッタがいた。

エクレールはシンク達に状況を説明する。

シンクとリコッタは侵入者の存在に驚く。
そして侵入者が学院の屋根を壊したと話すと、

「学院の屋根を！？みんなは無事なのでありますか！？」

「ああ。幸い怪我人はいなかったらしい。」

「よ、よかった・・・であります。」

やはりリコッタは学院の話をする、他の学院生の安否をきずかった。

「だとすると、急いで戻らないと。」

「当然だ。」

「もちろんであります！」

こうして3人は急いで騎士団詰め所へと戻っていった。

- - - - -

「待て！逃げるな！」

「観念しろ！侵入者！」

ここは、フィリアンノ城の中。今ここでは壮絶な追いかけて行われていた。

「あゝもう！しつこいな！」

武装した騎士達から逃げる映司はうんざりしていた。

かれこれもう数十分こうして追われている。

（何とかして振り切らないと……。）

映司は走りながら、追っ手を振り切る方法を考える。

すると目の前に、通路が右、真っ直ぐ、左に別れている。

（どうしよう。どれに行けば……。）

映司は迷うが、

（ん？あれは……。よしこれでいこう。）

映司は右に曲がる。

「右か！」

「逃がさん！」

騎士達も映司を追い右に曲がる。が……

「何、どこに消えた！？」

そこに映司の姿はなかった。

「とりあえずこの先に進もう。」

「そうだな。今度会ったら絶対捕まえる！」

騎士達はそう呟き、そこから立ち去って行った。

すると・・・

ガタ、

「ふう、何とかやり過ごしたかな。」

置いてあった樽から映司が出てきた。

実はあの時、右の通路に樽を見つけた映司は、賭けで右に曲がり樽の中に入ったのだ。

「でも、樽の蓋開いててよかった。」

正直開いてなかったら捕まっていただろうと考える。

「とりあえず移動しよう。」

映司は再び移動を始めた。

場所は変わり、騎士団詰め所。現在ここは、侵入者捜査の拠点となっている。

そして今この侵入者捜査を指揮しているのは、ビスコッティ騎士団

騎士団長ロラン・マルティノッジ、つまりエクレールの兄である。

「どうだ？侵入者はいたか？」

「駄目ですね。見つけたとしても振り切られてしまってます。」

「そうか……。」

どうやら侵入者はかなりのやり手のようであり、騎士達の追跡を交わし続けている。

「手強いな……。」

まさかここまで苦戦するとは思っていなかったため、ロランはまいつてしまっている。
すると、

コンコン。

ドアを叩く音した。

「良いぞ、入ってくれ。」

「失礼します。」

入って来たのはロラン待望の人物だった。

「エクレ、よく戻ってきた。早かったな。」

「はい。緊急事態ですから。」

入って来たのは妹のエクレールだった。実はあそこからかなり飛ばしてきたのだ。

「主席と勇者殿は？」

「リコは避難している学院生の元に、勇者はそれに付き添って行きました。」

「そうか……。分かった。」

「兄上、現状は？」

エクレールは今どのような状況か質問する。

「騎士達が搜索しているが……。思った以上に難航している。」

「分かりました。私も行きます。」

「頼んだぞ。エクレ。」

「了解。」

状況を把握したエクレールは映司搜索の為、ロランのいる部屋から出て行き、映司がいるフィリアンノ城に向かった。

場所は再びフィリアンノ城。

騎士達の搜索は今も続いている。

「はぁ・・・何時まで続くんだろっ・・・これ。」

映司はため息をつく。

はつきり言ってもう止めにしてほしい位である。

映司は追っ手から次々と逃れ、通路を歩き続けている。止まれば見
つかりやすくなる。そう思い映司は歩き続ける。すると開けた場所
にでた。そこは庭園のような場所だった。

「うあゝ綺麗だな・・・。」

その庭園はとても整備されており、花も綺麗に咲き誇っている。噴
水もあり水が絶え間なく出ている。

この光景は、明日のパンツを失った映司の心を癒やしていった。

が、それは長くは続かなかった。

「見つけたぞ！お前が侵入者だな？」

映司は思わず振り返った。先ほどまで自分を搜索していたのは男の
はずだ。

なのに今聞こえたのは男の声ではなかった。

「お、女の子？」

「女の子で何が悪い。」

そう、女の子だ。

緑色の髪の少女だ。

映司は緑色の髪の少女、エクレールの出現に動揺する。

「何で女の子が・・・」

「それは、私も騎士だからだ。今の私の任務は侵入者であるお前を拘束することにある。多少の損傷はしょうがないが、ここでお前を捕まえる！」

エクレールは背中の中鞘から2本の短剣を取り出す。右手で普通に持ち、左手は逆手持ちにする。

「・・・行くぞ！」

エクレールはそのまま映司に向かって走り切りかかる。

映司はそれをギリギリで回避する。

エクレールはすぐさま次の動作に入り、映司を追撃する。

映司は追撃を受けるも、それどころくじりて回避する。

「ちょこまかと！」

エクレールは更に攻撃を仕掛ける。

映司はそれさえもよける。

(く・・・早く何とかしないと！)

焦る映司をよそに、エクレールの攻撃は止まらない。

「ぐあー！」

エクレールの剣による攻撃をよけ続けた映司だったが、ついに不意打ちの蹴りをくらい、後ろに転がりながら倒れる。その時、映司のポケットから何かが飛び出したが2人は気づかない。

「・・・観念しろ。」

エクレールが剣を構えながら近づいてくる。

（くそ・・・どうすれば・・・。）

映司は後ずさりながら思考をフル回転させている時だった。

力チ。

何が映司の右手に当たった。

本来なら石か何かだろうと思いきにしないが、映司は右手に当たった物を手に取った。

それは・・・赤いメダルだった。

（これって・・・まさか・・・。）

映司はその後ろを見る。

そこには、自分の拾った赤いメダルと同じような赤いメダルが2枚

落ちていた。

（・・・やるしかない。）

映司は早速行動に移した。

急いで後ろに向かって走り、残り2枚を回収し、エクレールと対峙する。

そして、映司は懷からオーズドライバーを取り出し、腰に装着する。オーズドライバーが腰に装着されると、映司はさっき回収した3枚の赤いメダルを左から1枚ずつ入れていく。

（こいつは一体何をしてるんだ？）

エクレールには何をしているかさっぱり分からない。

映司は全てのメダルを装填を終える。

そしてメダルが装填されている部分を斜めにし、オースキャナーを持つ。

辺りに電子音が響き渡る。

そしてオースキャナーを使い装填されたメダルをスキャンした。

「・・・変身！」

《タカ！クジャク！コンドル！　タ~~~~ジャ~~~~ドル~~~~！！！！》

すると映司の身体の周り、頭、胴体、脚にそれぞれ5色（赤、青、黄、緑、灰）の動物が書かれた円形エフェクトが回転しながら現れる。

そして、その中赤い円形エフェクトに書かれているタカ、クジャク、コンドルが一つになり、映司に合わさる。

次の瞬間映司は一瞬にして赤を貴重とした戦士に変わったのだった。

・　・　・　・　・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950y/>

仮面ライダーオーズ/OOO feat. DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

2011年11月10日03時17分発行